The background of the entire page is a photograph showing a flooded area. In the center, a white, rectangular building is partially submerged in dark, rippling water. The sky is overcast and grey, contributing to a somber and desolate atmosphere. The water level appears to be quite high, reaching up to the windows of the building.

3.11

**東日本大震災
消防活動記録**

名取市消防本部

3.11 東日本大震災の活動記録

目次

発刊にあたって

平成23年3月11日(金)14時46分に発生した、三陸沖牡鹿半島を震源とするマグニチュード9.0、最大震度7の東北地方太平洋沖地震は、国内観測史上最大規模の大地震となり、この地震による大津波で東北の太平洋沿岸地域では、人的、物的に大きな爪跡を残す未曾有の大災害となりました。

名取市においても、特に津波による被害は甚大で、^{ゆりあげ}閑上地区及び下増田地区の沿岸部では高さ約9メートルを越す巨大津波により950余名の死者・行方不明者を出し、さらに街並み及び集落が一瞬にして消滅するなど、想像を絶する壊滅的な被害を受けました。

当市消防本部は発災直後から、職・団員総力を上げ不眠不休で被災者の救護にあたりましたが、その中には、自らも被災し家族の安否も確認できないまま、消防人としての使命感で業務を遂行した者も数多くおりました。過酷な状況の中、一身を挺して任務遂行にあたられたことは消防としての誇りであり褒め称えるものでありますが、消防職員3名、消防団員16名が避難誘導中に津波にのまれ殉職したことは、誠に痛恨の極みであり断腸の思いであります。

また、全国からの緊急消防援助隊、県内消防応援隊、自衛隊、海上保安庁、警察、各関係機関皆様方の活動支援は、我々消防活動の大きな支えとなるばかりでなく、その勇姿は市民に大きな安心感を与え被災者の救済に大きく貢献されました。

この記録誌は、本市消防がかつて経験したことのない、東日本大震災という大災害での消防活動と、今後も起こりうる大規模災害への備えを後世に伝えるとともに、歴史的な大災害を風化させない貴重な資料として受け継がれることを願い編纂しました。

おわりに、全国の消防機関、各関係機関の皆様には発災直後から救援活動にご尽力をいただきましたことと、お忙しい中、資料をご提供いただきましたことに深く感謝を申し上げ、発刊にあたっての挨拶といたします。

平成25年3月11日

名取市消防本部

消防長 今野 新一



東日本大震災の概要

- 地震発生直後の名取市消防災害記録 1
- 第1章 名取市の概要 3
 - 1. 地理及び配置図
 - 2. 人口
- 第2章 名取市の被害概要 4
 - 1. 地震の状況
 - 2. 被害の状況
 - 3. 消防関係の被害状況
- 第3章 名取市消防本部の活動状況 9
 - 1. 消防概要
 - 2. 消火活動
 - 3. 救急活動
 - 4. 救助活動
 - 5. 捜索活動
 - 6. 消防団活動
 - 7. 婦人防火クラブの活動
- 第4章 緊急消防援助隊・宮城県広域消防相互応援隊 23
 - 1. 広島県隊
 - 2. 富山県隊
 - 3. 長野県隊
 - 4. 仙南地域広域行政事務組合消防本部
- 【職員の手記】 33
 - 省みて 37
 - むすびに 39

地震発生直後の名取市消防災害記録（一部抜粋）

3月11日

- 14:46 三陸沖（牡鹿半島の東南東130km）を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震が発生、震源の深さは約24km。名取市では震度6強の強い揺れが約3分間続いた。宮城県内では栗原市築館で最大震度7を観測
- 14:49 気象庁は「大津波警報」発表 閑上・下増田地区避難指示に伴う避難広報・誘導開始
- 14:58 閑上海岸の避難誘導へ閑上隊出向中、ヨットハーバーで海中転落事故発生
- 15:01 大型ショッピングセンターの天井崩落事故発生負傷者多数
- 15:21 閑上大橋上で交通事故発生
- 15:23 出動各隊、現在引き潮が発生。岩手・釜石方面では4mの津波が発生中
- 15:31 潮位観測装置において1mの潮位低下を確認
- 15:36 緊急消防援助隊の要請
- 15:44 閑上出動各隊、津波発生の恐れあり、閑上方面からの引き上げ命令
閑上隊、閑上公民館への退避連絡
- 15:50 閑上大橋で名取川の川底が見えるほどの水位低下を確認
- 15:52 海上沖合に高さ7～8mの押し寄せる津波を確認
- 15:54 閑上大橋で名取川を遡上する津波を目視で確認
- 15:56 閑上大橋で津波が堤防を越え、街の中へ流れ込むのを確認
- 16:03 閑上街区津波により壊滅状態
- 16:08 閑上一丁目で津波により流された住民を救助
- 16:12 閑上公民館、閑上小・中学校の屋上に多数の避難者を確認
- 16:21 高柳地区までの津波を確認
- 16:22 大型ショッピングセンターの客及び従業員約3,000名を指定避難所へ誘導
- 16:40 閑上七丁目地内で火災発生
- 16:42 閑上七丁目地内で火災発生
- 16:45 閑上字昭和で火災発生
- 16:50 閑上一丁目でボート隊により孤立した住民を救助
- 17:40 仙台空港敷地内で火災発生
- 18:00 小塚原地区で火災発生
- 18:20 閑上字新大塚地内でボート隊により孤立した住民を救助
- 19:00 下増田地区の保育園で園児等65名を救助
- 19:20 宮城県広域消防相互応援協定に基づく仙南地域広域行政事務組合消防本部応援隊が到着
- 20:51 閑上浄水場付近で漁船上の2名を救助
- 21:04 仙南消防応援隊が活動開始
- 21:06 閑上一丁目五差路の歩道橋上に避難していた住民を救助
- 21:53 東部道路名取IC事務所付近の逃げ遅れ120名を救助
- 23:15 下増田字飯塚地内で孤立した住民を救助
- 22:31 閑上小学校の避難者約800名を確認

3月12日

- 0:10 下増田字藤原・女ヶ池地区でボート隊により孤立した住民を救助
- 1:23 杉ヶ袋地区で孤立した住民を救助
- 1:55 杉ヶ袋地区運送会社に多数の避難者確認
- 6:06 緊急消防援助隊富山県隊が野営場所到着
- 6:10 下増田字広浦地内でボート隊により孤立した住民を救助
- 8:00 自衛隊と合同による仙台空港敷地内、避難者の救出開始
- 8:22 富山県隊が救助活動開始
- 8:30 仙南消防応援隊により小塚原地区から孤立した住民を救助
- 9:08 宮城県農業高等学校内に教師70名、生徒125名の避難者を確認
- 10:10 小塚原地区で孤立した住民を救助
- 10:25 仙台空港ターミナルビル到着（約1,300名の避難者、うち自力避難困難者約50名）
- 11:51 仙台空港ターミナルビルより避難者の搬送開始
- 12:04 下増田字広浦地内、貞山運河の堤防が3ヶ所決壊
- 12:34 杉ヶ袋字尻田村地内より孤立した住民を救助
- 13:46 仙台空港活動隊からの増隊要請により仙南消防応援隊が出動
- 13:52 閑上一丁目五差路付近でボート隊により孤立した住民を救助
- 14:00 仙台空港第3ゲートより名取隊・富山県隊進入、救助活動開始
- 15:51 閑上小・中学校の避難者を消防団車両等により避難所へ搬送
- 15:54 閑上一丁目から名取隊・富山県隊合同による検索開始
- 19:00 小塚原字西中塚地内で火災発生

3月13日

- 7:10 検索活動隊（名取隊、仙南消防応援隊2隊、消防団隊、合計4隊）活動開始
- 7:49 閑上一丁目五差路内に前進指揮所を開設
- 8:41 小塚原地区救助要請、名取隊・仙南消防応援隊出動
- 9:05 杉ヶ袋地区でボート隊により孤立した住民を救助
- 13:24 下増田字新田北浦地内で孤立した住民を救助
- 14:10 閑上字庚新塚地内で火災発生
- 14:30 ボート隊により杉ヶ袋地区から孤立した住民を救助
- 17:32 小塚原字汐押地内で火災発生
- 17:50 緊急消防援助隊広島県隊が野営場所到着
- 18:00 緊急消防援助隊広島市消防局指揮支援隊が消防本部に到着し活動開始

3月14日

- 8:14 下増田沿岸部へ名取隊・仙南消防応援隊・富山県隊検索出動
- 8:29 広島県隊が活動開始
- 17:00 小塚原字寺田地内で火災発生

第1章 名取市の概要

1. 地理及び配置図 (平成23年3月現在)



2. 人口

	男	女	合計	世帯数
平成23年 2月	35,764人	37,086人	72,850人	26,813世帯
平成24年12月	35,829人	37,167人	72,996人	26,883世帯

第2章 名取市の被害概要

1. 地震の状況

名称 平成23年(2011年) **東北地方太平洋沖地震**
 発生日時 平成23年3月11日(金) 14時46分
 震源地 三陸沖牡鹿半島東南東130km付近
 (北緯38度06.12分、東経142度51.36分地点)
 震源の深さ 約24km
 地震の規模 モーメントマグニチュード9.0
 最大震度 震度7(宮城県栗原市)
 市内震度 震度6強
 津波 同日14時49分 太平洋沿岸に大津波警報発表(気象庁)
 津波到達時刻 15時52分(関上大橋上)
 名取市での最大浸水高、9.09m(関上漁港付近)

【最大余震】

発生日時 平成23年4月7日(木) 23時32分
 震源地 宮城県沖牡鹿半島東南東40km付近
 (北緯38度12.2分、東経141度55.2分地点)
 震源の深さ 約66km
 地震の規模 マグニチュード7.2
 市内震度 震度6弱
 津波 同日23時34分 太平洋沿岸に津波警報発表(気象庁)

2. 被害の状況

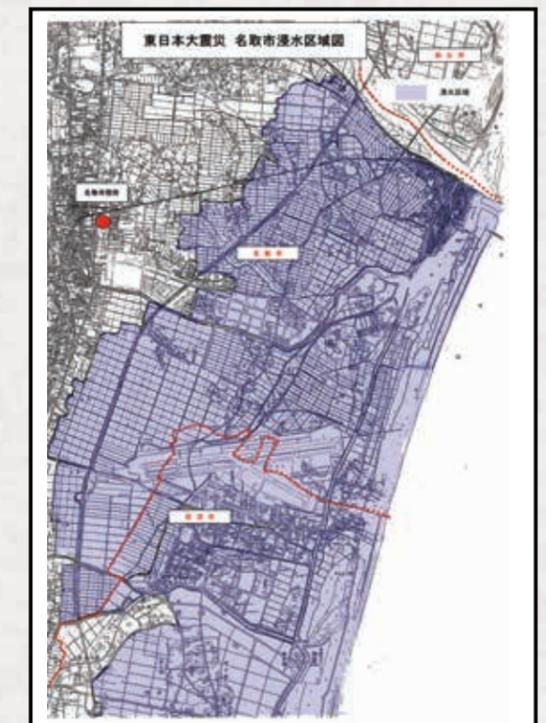
(1) 人的被害 (平成24年12月現在)

死者	911人
行方不明者	41人
負傷者	重症 14人
	軽症 192人

(2) 建物被害 (平成24年12月現在)

住 宅 合計 13,991棟	全 壊	2,801棟
	大規模半壊	219棟
	半 壊	910棟
非 住 宅 合計 2,805棟	一部損壊	10,061棟
	全 壊	964棟
	大規模半壊	136棟
	半 壊	319棟
	一部損壊	1,386棟

浸水図



3. 消防関係の被害状況

(1) 人的被害（合計19名、広報巡回・避難誘導中津波により殉職）

- ・消防職員 関上出張所 3名
- ・消防団員 関上分団 11名
- 下増田分団 4名
- 増田分団 1名

(2) 物的被害

①消防本部

- ・消防本部主救助訓練塔 1棟（地震により全壊）
- 副救助訓練塔 1棟（地震により一部損壊）
- ・消防署関上出張所 1棟（津波により全壊）
- ・通信指令設備 1式（津波により全壊、関上出張所分）
- ・潮位観測装置 1式（津波により全壊）
- ・水槽付消防ポンプ自動車 1台（津波により全損）
- ・マイクロバス 1台（津波により全損）

②消防団

- ・消防団員詰所及び車庫 12棟（津波により全壊等9棟、地震による一部損壊3棟）
- ・小型動力ポンプ付積載車 7台（津波により全損）
- ・水防倉庫 2棟（津波により全壊）



関上出張所水槽付ポンプ自動車



下増田分団第5部積載車



関上分団第2部積載車



関上分団第4部積載車

東日本大震災消防職団員殉職者合同慰霊祭

東日本大震災で公務執行中、市民を守る盾となり殉職した消防職員3名、消防団員16名の合同慰霊祭が、名取市消防本部・名取市消防団主催により平成23年7月18日(月)午後2時から市内に於いて慎ましく執り行われた。

祭壇



別れを惜しむ職・団員

名取市長が別辞を捧げる



協力：仙台市消防音楽隊



消防長室に、殉職した職・団員の氏名を木簡にして後世に継承する。

消防団部長	消防団部長	消防団部長	消防団部長	消防団部長	消防団部長	消防団部長	消防団部長	消防団部長	消防副分団長	消防副分団長	消防副分団長	消防分団長	消防分団長	消防職員	消防職員	消防職員	殉職者	
高橋功一	佐々木新太郎	菅井太貴	森達也	都澤章	佐藤正博	伊東洋一	櫻井一步	赤間一雄	鈴木祥平	赤間晴晃	大友雄繁	安齋光一	菊地健二	石山俊勝	大友勝	野地航	荒川健一	高橋淳

被災前後「閑上地区」



市内でも大きな街並みを有した閑上の港町や海水浴客で賑わった閑上海岸、その姿は津波襲来後全て消えてしまった。地盤沈下、液状化など1年以上過ぎた今も傷跡は消えない。

「写真提供：社団法人東北建設協会」

被災前後「下増田地区」



仙台空港の東に位置し、貞山堀と海岸沿いに続く松林に挟まれた集落。その全てが津波により薙ぎ倒されてしまった。仙台空港が運行を再開した今も風景は変わらない。

「写真提供：社団法人東北建設協会」

第3章 名取市消防本部の活動状況

1. 消防概要

地震発生直後、直ちに各署所間の連絡体制の確認、職員、庁舎及び車両等の被害確認を行うと同時に地震・災害情報の収集を行った。

(1) 非常配備の発令、避難勧告・指示等

3月11日

- 14時46分 第三次非常配備（消防職・団員自主参集）
- 14時49分 市災害対策本部設置（市役所内）
部 隊 本 部 設 置（消防本部内）
大 隊 本 部 設 置（消防署内）
消 防 団 本 部 設 置（消防本部内）
大津波警報発表に伴い関上・下増田地区に避難指示発令（市災害対策本部）
- 15時46分 発生から1時間以内に90%の職員が自主参集し、10%については被災、交通渋滞により数時間後参集。（参集率100%）

4月13日

- 17時00分 第二次非常配備に切替

5月16日

- 17時00分 第一次非常配備に切替

(2) 保有車両台数

(平成 23年 3月)

	消防車両合計	水槽付消防ポンプ自動車	小型動力ポンプ付水槽車	化学消防ポンプ自動車	消防ポンプ自動車	救助工作車	高規格救急自動車	資機材搬送車	マイクロバス	指令車	指揮車	その他の車両	小型動力ポンプ付積載車
合計	60	4	1	1	3	1	3	1	1	1	3	5	36
消防本部	5								1	1		3	
消防署	11	1	1	1	1	1	2	1			1	2	
手倉田出張所	1	1											
関上出張所	1	1											
高館出張所	3	1			1		1						
消防団	39				1						2		36

(3) 119番通報状況

(発災より1週間)

	合計	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日
合計	707	331	178	26	32	57	55	28
火災	41	20	7	0	3	8	1	2
救急	144	23	33	8	14	18	29	19
救助	232	172	60	0	0	0	0	0
警戒調査	32	6	2	1	0	18	3	2
その他	258	110	76	17	15	13	22	5



2. 消火活動

東日本大震災に起因する火災発生は12件で、全てが津波襲来後となっている。

また、発災から6ヶ月が過ぎた9月に、津波により大量に発生した瓦礫を野積した集積場からの火災も3件発生した。

(1) 震災に起因する火災

番号	月 日	覚知時間	火災種別	発生場所	備 考
1	3月11日	16:40	建物火災(全焼)	関上七丁目	浸水により現場到着できず 13日10:00 自然鎮火。
2	3月11日	16:42	その他の火災	関上七丁目	浸水により現場到着できず 13日10:00 自然鎮火。
3	3月11日	16:45	その他の火災	関上字昭和	交差点内に流れ堆積した瓦礫から出火 13日9:00 自然鎮火。
4	3月11日	17:40	建物火災(全焼)	仙台空港敷地内	浸水により現場到着できず 鎮火時刻は不明、自然鎮火。
5	3月11日	4月1日 15:30	建物火災(全焼)	小塚原字西中塚	事後聞知 鎮火時刻は不明、自然鎮火。
6	3月11日	18:00	建物火災(半焼)	小塚原字寺田	温室内に車両・船舶が流れ着き出火 翌日12日17:30に放水鎮火。
7	3月12日	19:00	その他の火災	小塚原字西中塚	津波で流され堆積した瓦礫から出火 12日21:10放水鎮火。
8	3月12日	3月25日 10:00	その他の火災	関上字新鶴塚	事後聞知 鎮火12日時刻は不明、自然鎮火。
9	3月13日	14:10	その他の火災	関上字庚申塚	検索活動中に火災を発見したもの 13日15:15に放水鎮火。
10	3月13日	17:32	その他の火災	小塚原字汐押	津波で流され堆積した瓦礫から出火 13日19:20放水鎮火。
11	3月14日	17:00	その他の火災	小塚原字寺田	津波で流され堆積した瓦礫から出火 14日17:55放水鎮火。
12	3月14日	3月26日 11:00	建物火災(部分焼)	小塚原字西中塚	事後聞知 鎮火時刻は不明 自然鎮火。

夜通し燃え続けた関上七丁目建物火災



「写真提供：佐々木直哉」



「写真提供：エリック・チャン」



「写真提供：松本康裕」

仙台空港敷地内に建つ倉庫内に流れ込んだ多数の車両



(2) 瓦礫集積場からの火災

番号	月 日	覚知時間	火災種別	発生場所	備 考
1	9月16日	7:39	その他の火災	関上字東須賀	混在瓦礫の集積場から火災が発生し、宮城県広域消防相互応援協定に基づき応援を要請したもの。
2	9月19日	3:06	その他の火災	関上字東須賀	上記消火活動中に新たな場所より出火。重機で山を崩しながら消火活動したもの。
3	9月22日	5:59	その他の火災	小塚原字西土手	第二集積場からの火災で、堆積した畳より出火。

平成23年9月16日(金)7時00分頃津波により大量発生した混在瓦礫の集積場から発生した火災で、効果的な注水が行えず長期化が見込まれることから宮城県広域消防相互応援協定に基づき応援出動を要請、仙台市消防局、仙南地域広域行政事務組合消防本部、岩沼市消防本部、亘理地区行政事務組合消防本部の協力を得、20日(火)16時40分鎮火。

また、消火活動中の19日(月)3時06分頃集積場の新たな場所から出火、22日(木)12時26分鎮火、7日間という長い消火活動となった。



3. 救急活動

(1) 3月11日の活動

地震発生とともに消防職員が自主参集したが、初期段階では119番通報により全ての当直救急隊が出動していた。被害の実態が明らかになるにつれ傷病者増加が予想された為、予備救急車を自主参集した職員により編成し出動した。

沿岸部に津波が襲来後は、さらに傷病者の大幅増加が見込まれる為、本部敷地内にエアートtentによる応急救護所を設置、傷病者受け入れの準備を行った。



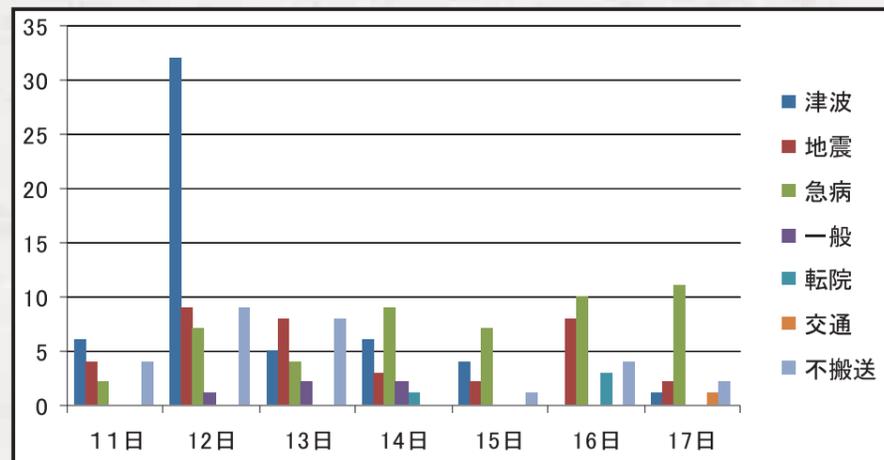
付近住民が消防本部に避難して来たが、怪我人が含まれていない事から直近の指定避難所に避難するように指示する。

閑上地区等から避難して来た住民にはトリアージを実施し、医療機関への搬送が必要と判断した住民は傷病程度により適切な医療機関へ搬送、必要のない住民は近くの指定避難所へバスで搬送した。

【地震発生後1週間の救急搬送種別】

	津波	地震	急病	一般	転院	交通	不搬送	合計
11日	6	4	2				4	16
12日	32	9	7	1			9	58
13日	5	8	4	2			8	27
14日	6	3	9	2	1			21
15日	4	2	7				1	14
16日		8	10		3		4	25
17日	1	2	11			1	2	17
合計	54	36	50	5	4	1	28	178

【地震発生後1週間の救急搬送種別グラフ】



(2) 3月12日の活動

緊急消防援助隊富山県隊が到着した。富山県隊の救急隊は3隊で、名取隊は予備車も含め4隊、合計7隊で救急活動を行い、富山県隊には当本部の隊員を1名乗車させ、地理的補助を行った。



この日から救助活動が本格的になり要救助者の数が急増、救急隊も常に活動している状態が続いていた。

応急救護所にも被災地からの避難者が多数押し寄せ、トリアージを行い医療機関への搬送が必要だと判断した避難者は医療機関へ搬送、必要でない判断した避難者は指定避難所へバスにて搬送した。

7隊の救急隊が出動していて、消防署には救急車がなく、応急救護所の避難者を病院へ搬送するのがだいぶ遅くなってしまった。

また応急救護所を担当する救急隊員も避難住民の数に対してあまりにも少なく、応急手当もままならない状態だった。

(3) 3月13日の活動

12日に引き続き、富山県隊3隊、名取隊4隊の合計7隊で活動していた。しかし前日のような混乱は収まりつつあり、病院への搬送も円滑に行えるような状態になった。

救急隊は出動し続けているが、前日までの現場や応急救護所からの搬送より指定避難所からの救急要請が多くなった。

地震発生当日から停電が続いたが、消防無線及び救急無線の使用は可能であった。しかし、携帯電話が不通となり医療機関への収容依頼ができず、傷病者の収容先を選定するのに困難を極め、このことが救急活動に多大な負担を掛ける結果となった。

医療機関への連絡手段としては、本部の災害対応電話で連絡してもらうか、直接医療機関へ赴き傷病者の収容可否を問う以外方法は無かった。

幸い近隣の医療機関では災害時の体制になっていて、多数の傷病者を飛び込みで収容していただいた。



4. 救助活動

3月11日14時46分 地震発生、名取市内の大型ショッピングセンターにおいて多数の負傷者発生に伴う救助出動。その後、閑上大橋上において発生した交通救助事案に次期出動し救助活動開始。活動中、名取川の水位の低下を確認、救助工作車を安全な場所へ移動した。しばらくすると名取川を遡上する津波を目視で確認、堤防を越えた津波は閑上町内を襲い本隊は橋上で孤立状態となった。



救助隊は直ちに救助工作車を起点に、津波によって流されたり、住宅や車内に取り残された人の救助活動を実施する。救助工作車が津波による海水で周囲を囲まれ移動不能となったことから、救助隊員は消防隊と合流し消防車両に乗り換えて救助活動にあたる。

その後、救助隊を2隊に編成し、12日以降に移動可能となった救助工作車で自衛隊と共に閑上地区及び小塚原地区の救助にあたる隊と、アルミボートを使用して下増田地区及び杉ヶ袋地区の救助にあたる隊に分かれて活動を実施した。

(1) 3月11日の活動

① 支柱の下敷きになった車両からの交通救助

県道塩釜亘理線閑上大橋上で、地震の揺れにより下り車線を走行中の大型トレーラーの荷台からコンクリート製の支柱（直径60cm×長さ5m）7本が落下し、うち3本が上り車線を走行中の乗用車を押し潰したものの。



現場到着時、車内には1名が乗車していたが運転席が押し潰されており、運転手は呼びかけに反応なし。支柱は上下車線を塞いでおり、積み重なった状態と重量から救助工作車のクレーン及び資器材での移動は困難で、重機の要請が必要な状況であった。

しかも、到着時には既に大津波警報が発表されており、救急隊及び警察官と協議の結果、運転手は緊急の救出を要しない状態であることと重機の到着には時間がかかることから、二次災害防止の措置をとり周囲の避難誘導を行うこととした。

② 津波で流された要救助者の救助

閑上大橋上には、付近の住民や渋滞に巻き込まれたドライバー約50名が集まっていたため、閑上小学校への避難を呼びかけ始めた。ところが、名取川の水位が急に低下し始め川底があらわになったため、津波の襲来を予測し周囲より高所にある橋のたもとに留まることとした。

そこへ太平洋から向かってくる茶色の壁、大津波が押し寄せてきたのである。津波は足もとの名取川を恐ろしいほどの勢いで遡上し、堤防を越水し始めた。やや遅れて閑上一丁目地内は、漁港側から押し寄せたと思われる津波により瓦礫や車両がバキバキと音をたてながら流されてきた。しかし、幸いにも橋上及び橋のたもとは浸水を免れたのである。

閑上一丁目の堤防沿いの角地には、津波と共に家屋の一部や家電製品等が流されて滞留している。その中に、頭部と両手のみを水面から出した男性と女性を発見。呼びかけには応えるものの、両名とも瓦礫に囲まれ自力で移動は不可能な状態であった。雪が舞い始め水温も低く仙台市から津波警報のサイレンが鳴り響く中、三連梯子を伸梯し水面と瓦礫上に浮かべ、隊員1名を渡して男性を水中から救出。続いて三連梯子の先に鍵付き梯子を設置し、浮いている車両や屋根を渡り再度鍵付き梯子を掛け直して女性を確保。隊員2名で屋根上に引き上げてバスケット担架に縛着し、水面の梯子や木材上を滑らせるように介添えしながらロープで牽引し救出した。

その後、同地区では歩道橋上やコンビニエンスストアに避難した住民約30名以上を堤防まで誘導し、橋のたもとに待機した住民らとともに、堤防沿いをバス等で搬送した。

③ 活動進入路の調査

地震発生により非番参集した救助隊は、津波が押し寄せ壊滅状態となった閑上地区への進入経路の調査に出動。県道閑上港線は津波から避難しようとして西へ向かう車両が延々と連なり、大曲地区では、徒歩で避難してきた人から「後ろの方の車が津波で流されたので、怖くて車を置いて逃げてきた」という情報を得る。高柳地区へ入ると水田には、津波とともに発泡スチロール等のごみが流されてくるのを視認する。更に進むが道路は浸水し瓦礫で塞がれ、隊員は徒歩で調査に向うこととした。そして東部道路付近までたどり着くと、そこには現実と思えない光景が広がっていた。津波により流されてきた住宅の屋根や、閑上港に係留してあったと思われる漁船が、1km以上も流されてきて田畑や道路を埋め尽くしていたのである。その中には、音をたてて噴出しているプロパンガスボンベが多数確認できた。周辺にはガス臭が漂い引火すれば大爆発の危険があるため、一つずつバルブを閉めながら調査を進めた。

しかし、その間も付近の住民や通行人から救助を求められ、閑上地区まで到達する事ができなかった。この時、救助隊の装備はライフジャケットと救命浮環のみであった。



④ 家屋等に取り残された要救助者の救助

津波により浸水した閑上一丁目地内の数軒の民家に、取り残された人が6名いた。その中の1名の女性は、民家の壁面に設置された電力量計の上に立ち、壁にしがみついて助けを求めている。水位は約1.5m程度だが水中には車両やパイプ等、水面には瓦礫や油が浮かんでおり歩行は困難である。直ちにボートを要請後、周辺で船や浮力の大きい代用品を探したが救助に適したものは見当たらず、上空を巡視していた宮城県警へりを誘導し降下してきた隊員と救出方法を協議するも、付近には電線があり上空からのピックアップは不可能なので、別の大橋上にいる緊急を要する傷病者の搬送を依頼し、女性らには声を掛け続けてボートの到着を待った。

その後、消防隊によって搬送されたゴムボートで女性を含む6名を救出した。現場は海岸に近いので津波再来の危険度が高く、ボートからベランダ等に渡っての救出が続いたため、隊員は最低3～4名の乗船が必要とされ救出には数往復を要した。



⑤ 車両上に逃れた要救助者の救出

閑上字新大塚地内の水田に、車両ごと津波に流されたのち車両上に逃げ助けを求める人たちが多数あった。その中には生後2ヶ月の乳児もおり、流されてから約7時間が経過していた。水深約1m、範囲は約8万㎡。気温も低下している。ハンドマイクで各車両の人数と健康状態を確認し乳児の救出優先を伝えると、快諾を得られたため救助を開始した。

行灯松^{あんどんまつ}付近を起点に、瓦礫を避け試行錯誤しながら乳児のもとに向うがガードレールが行く手を遮る。その切れ間にも多量の瓦礫が押し寄せており、除去を試みるが動かない。ボートを持ち上げてガードレールを乗り越えたとしても、要救助者を乗せては引き返せない。別ルートを探すため帰艇する途上、3名を救出。帰艇後、東部道路及び県道閑上港線からの進入ルートを検索するも、全て瓦礫により塞がれている。

その後、自衛隊と合流し二手に分かれて進路を開くため、再度、行灯松付近から進入。この時点で最初の出艇から約3時間が経過しており、海水が若干引いて切れ間の瓦礫も少なくなっていた。そこで瓦礫を撤去して救出路を確保し、乳児をはじめとする13名を救出した。

水中の瓦礫のために船外機は使用できず、人力による操艇移動距離は5km以上、さらに引き波が強い状況下での救出活動は困難を極めた。



⑥ 保育施設からの救助

下増田地区にある保育園では、津波による浸水で園児及び職員65名が孤立状態になったため救助を要請。この施設は平屋建てであり1階部分が浸水してきたため、職員が子供たちを抱えて脚立で屋根に上り避難していた。

周辺の道路は約80cmの浸水で、乳幼児を避難させるのは困難な状況であった。救助隊は浸水地域でも走行できるように改造された消防車両で、美田園駅前に待機していた搬送用バスまでピストン輸送し、全員を救出した。

この地区では他にも孤立した住宅から妊婦や子供、老人をゴムボートに乗せ隊員が腰まで水に浸かりながら救助活動を実施。活動を終了し署へ戻ったのは12日の6時頃だった。

雪の舞う厳寒の夜間、冷たい水に浸かりながらの救助活動は隊員の体力を消耗させ、更には津波再来の恐怖も伴い、隊員の体調・安全管理には大変苦勞した。

(2) 3月12日の活動

地震発生から続く救助活動は十分な休憩も取れないまま継続された。下増田広浦地区で屋根の上で手を振っている要救助者がいるという情報が入り現場へ向かう。ところが、海岸沿いに生えていた松の大木が津波で流されてきて道路を塞いでいたり、道路自体が陥没や流失している箇所があり、現場到着には困難を極めた。しかし、地元消防団の協力を得て現場までたどり着き、負傷していた要救助者の救出及び搬送を行った。

また、杉ヶ袋地区は田畑が見渡す限り津波により水没し、水深2～3m以上の場所も認められた。残った住宅の2階には救助を求めている人が多数おり、アルミボートに船外機を付けて救助に向かい日没まで往復しながら救助活動を実施した。夜間のボートを使用する救助活動は二次災害の危険性もあることから、夜明けまでは徒歩や消防車両による救助活動を実施した。

(3) 3月13日の活動

早朝、下増田広浦地区において床上浸水している住宅内に取り残されている人がいるとの通報があり出動、1階部分が浸水した住宅内から女性1名をアルミボートで救助した。その後も前日に引き続き、杉ヶ袋地区において孤立した住宅内で体調が悪くなった住民等の救助活動を日没まで実施した。



5. 搜索活動

津波により被害を受けた閑上・下増田地区の救助活動を行うと共に、行方不明者の搜索を実施。流された家屋や車両・船舶さらに河川の中、瓦礫堆積部を緊援隊の協力を得て、手作業や重機を使用して瓦礫を撤去しながらの搜索となった。



6. 消防団活動

名取市には6つの消防分団があり地震発生時、沿岸地域にある2つの分団は住民への避難広報・避難誘導を行った。また、他の分団では詰所や地区公民館に集結し被害状況調査や情報収集さらには火災に備え体制を整えていた。

3月中は全分団による搜索活動。4月以降は2分団単位の輪番で5月16日まで搜索活動を実施した。



7. 婦人防火クラブの活動

名取市婦人防火クラブの活動については、3月13日から自主的に支援活動を行っていた地域もあったが、名取市婦人防火クラブ連絡協議会としては、名取市ボランティアセンターと連携のもと、4月8日から支援活動に入った。

市内には8地区の婦人防火クラブがあり、特に被害の大きかった閑上地区と下増田地区を除く6地区から、毎日数名のクラブ員の協力を得て、炊き出し及び支援物資の仕分等を行っていた。





平成23年3月11日(金) 14:46
マグニチュード9.0の大地震発生
東北の玄関口 仙台空港を大津波が襲う

「写真提供：松木良夫」

第4章 緊急消防援助隊・宮城県広域消防相互応援隊

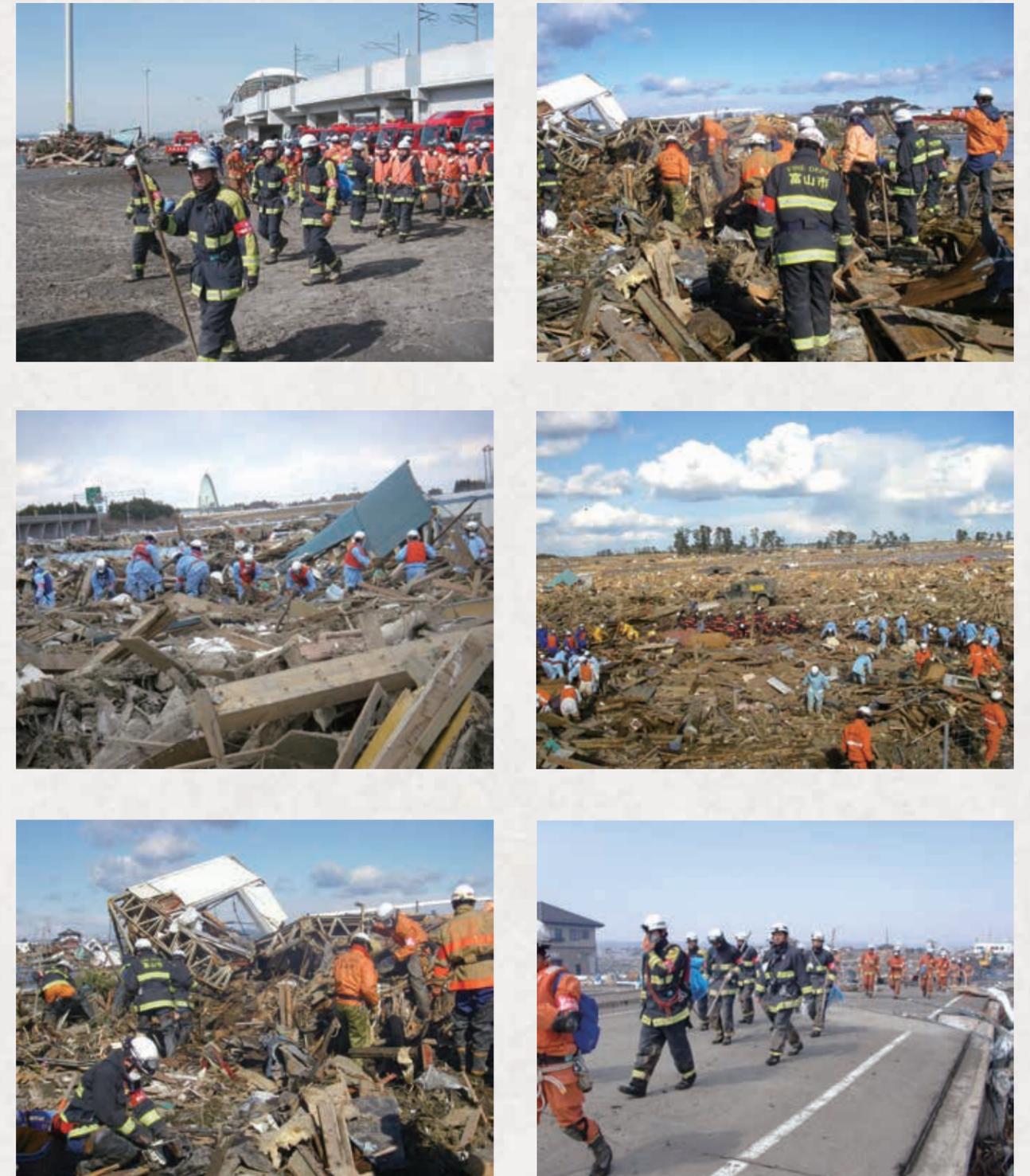
1. 広島県隊

出動期間 3月12日～4月15日
活動期間 3月14日～4月15日(31日間)
活動人員 第一次隊～第十二次隊、延べ936隊 3,881人
活動内容 救急・救助・搜索活動(閑上・下増田地区)



2. 富山県隊

出動期間 3月11日～4月13日
活動期間 3月12日～4月12日(32日間)
活動人員 第一次隊～第九次隊、延べ534隊 1,974人
活動内容 救急・救助・搜索活動(閑上・下増田地区)



3. 長野県隊

出動期間 3月11日～4月3日
活動期間 3月23日～4月2日(11日間、3月23日名取市へ転戦)
活動人員 第五次隊～第八次隊、延べ153隊 567人
活動内容 捜索活動(関上・下増田地区)



4. 仙南地域広域行政事務組合消防本部

出動期間 3月11日～4月2日
活動期間 3月11日～4月2日(23日間)
活動人員 消防隊1隊・ボート隊、延べ32隊 100人
活動内容 救助・捜索活動(関上・下増田地区)



緊急消防援助隊応援消防本部

北海道隊 札幌市消防局（指揮支援部隊長）

広島県隊（13） 広島市消防局（指揮支援隊長・県隊長）
福山地区消防組合消防局
呉市消防局
尾道市消防局
三原市消防本部
大竹市消防本部
東広島市消防局

富山県隊（13） 富山市消防局（県隊長）
魚津市消防本部
小矢部市消防本部（現：砺波地域消防組合）
高岡市消防本部
氷見市消防本部
射水市消防本部
砺波地域消防組合消防本部

長野県隊（13） 長野市消防局（県隊長）
須坂市消防本部
千曲坂城消防本部
岳南広域消防本部
佐久広域連合消防本部
上田地域広域連合消防本部

備北地区消防組合消防本部
廿日市市消防本部
府中町消防本部
江田島市消防本部
安芸高田市消防本部
北広島町消防本部

滑川市消防本部
黒部市消防本部
立山町消防本部
朝日町消防本部
入善町消防本部
上市町消防本部

松本広域消防局
北アルプス広域消防本部
木曾広域消防本部
飯田広域消防本部
諏訪広域消防本部
伊那消防組合消防本部
伊南行政組合消防本部

第一次野営場所（箱塚グラウンド）



広島県隊出発式



第二次野営場所（宮城県農業実践大学校）



富山県隊解隊式



緊急消防援助隊富山県隊隊長（第1次隊）手記

指揮部隊 富山市消防局 階級：消防監 氏名：黒田 喜和夫

派遣期間：第1次隊 3月11日から3月14日 4日間

“第1次隊の任務”

【出動準備】

3月11日。15時少し前。自席でわずかな揺れを感じた直後、課員の携帯電話が次々に鳴り出しました。メールは、宮城県北部で震度6強の地震を知らせています。テレビでは、東北地方の広い範囲で被害が出ていると繰り返していました。

私の緊急消防援助隊の活動は、この時から始まりました。

宮城県は富山県隊の出動準備区域です。日頃から、いつ出動命令があっても絶対に出動に遅れがあってはならないと出動計画書等を手元に置き、また心の準備を整えていたつもりでも、テレビに映し出されるととても災害を予感させる映像に思考は空回りしていました。

これではいけないと気持ちを入替え、消防庁から何も指示はないものの、課員に各消防本部へ出動可能隊の確認、後方支援本部の設置、富山市隊の出動準備、署に対し出動隊員の指名と自宅待機など頭をフル回転させ指示しました。

課員は分担し、手際よくこれらの準備を進めてくれました。

結果的には、この初動が富山県隊の出動の早さにつながり、多くの人を救うことができたひとつの要因になったものと思っています。

その後、各消防本部から出動可能隊数が報告され、また消防庁からも富山県隊に「待機」の指示がありました。その間にテレビの映像は、更に緊迫度を増しており「出動」を覚悟しました。

15時58分。消防庁から富山県隊の出動可能隊は全て出動するよう指示がありました。とにかく宮城県に向かえというものです。

各消防本部へ出動の連絡を終え、マイカーにいつも積んでいる3日分の着替えなど一式が入っているリュックを取り出し、慌ただしく集結場所の越中境PAへ向かいました。

【部隊移動—宮城へ】

集結場所で全隊が到着するのを待っている間に、消防庁から進出拠点は仙台南郵便局、活動場所は仙台市と具体的な指示がありました。

18時40分。富山県隊17隊68名の出発です。

この時、出動していたのは、富山県隊の他は東京消防庁、新潟県隊、長野県隊だったと記憶しています。県隊指揮車の携帯電話には、他県の指揮支援隊長や県隊長の電話番号が登録されており、今回の出動途上でも有効に活用できました。

北陸自動車道の黒崎PA付近を通過中に、東京消防庁の指揮支援隊長から、宮城県が被災した場合に指揮支援部隊長となる札幌市隊の到着が遅れるため東京消防庁が代行し、富山県隊の活動場所も名取市に変更になるとの電話がありました。また、磐越自動車道の磐梯山SA付近を走行中には、名取市に指揮支援隊が入っていないため、富山県隊が代行するよう指示がありました。

このように走行中にも新たな情報や指示が入りましたが、具体的な被害の状況はつかめませんでした。また、これらの情報は、各部隊長等を集め全隊員に周知するようにも努めました。

私は、指揮支援隊としての活動をまったく想定しておらず、県隊と指揮支援隊の二つの活動をどのようにすればよいのか整理できませんでしたが、とりあえず、県隊の指揮は別の人に任せようと思いました。阪神・淡路大震災の時に県隊が分かれ、指揮系統を分けて活動した経験が頭をよぎったのです。

経験は大きな財産になるものです。

そして、一刻も早く被災地に到着するため、休憩も最小限とし食事も越中境PAで買ったパンを食べながらの走行です。

しかし、夜間隊列を組んでの移動、給油の制限、磐越自動車道での圧雪、東北自動車道での道路の亀裂、段差等もあり移動は順調にはいかず、また不眠の移動は隊員にとって辛いものであったと思います。

このように活動場所の変更、給油の制限、道路状況の悪化など負の要素が増えていく中、今後の活動に不安を抱きながらも隊員を絶対に事故なく無事に帰すことだけを強く心に刻んでいました。

【名取市での活動調整】

12日5時30分。出発から約11時間かけて名取市に到着。休む間もなく、野営場所の設営と活動準備です。

県指揮隊は名取市消防本部に入り活動調整を行った結果、沿岸部で壊滅的な被害を受けた閑上地区と北釜地区で県隊を二分し活動することになりました。

県隊長として現場へ赴き、指揮にあたるべきところ、名取市消防本部の指揮支援本部で活動調整に当たらなければならず、指揮はそれぞれの地区で活動する上級指揮者に委ねました。

阪神・淡路大震災の時と同じ状況です。

また、宮城県庁の消防応援活動調整本部とは、地域衛星通信ネットワークを利用した衛星電話でしか連絡が取れず、連絡が取れてもなかなか返事が返ってこない状態が続き相当混乱していたようです。

現地の活動は、二つの地区での搜索活動を繰り返し行いましたが、隊員は刻々と迫る72時間の壁と闘いながら、最大限の力を発揮し泥まみれになりながら多くの要救助者を救助し、また被災者の避難介助に当たってくれました。

13日18時12分。ようやく広島県隊が名取市に到着し、指揮支援隊の活動を引き継ぎ、県指揮隊として現場活動ができるようになりました。

【不確実な情報】

今回の活動では、続発する余震と津波警報が継続する中、幾度となく流れてくる「津波がくる。」という情報にその都度活動を中断させられました。

その中でも、14日午前に県隊全員で北釜地区の搜索活動中に「自衛隊機が津波を確認し接近している。」との無線情報に、「全員避難、退避。！」と絶叫し、必死に数百メートル走り、付近で唯一残る3階建てビルの屋上に避難した時は、さすがに死の恐怖を感じました。

この情報は誤報でしたが、このように混乱する状況の中では、正しい情報なのかそうでないのかの判断ができず、隊員の命にかかわる情報は、すべて正しいと判断せざるを得ないのです。危険側に立つての判断です。

【活動を終えて】

第1次隊の任務は、迅速に出動し、刻々と変化する状況の中で被災地の活動を軌道に乗せることだと思います。その観点から今回の活動を振り返ると、早い段階で被災地に入ることもでき、事故なく多くの人を救い第2次隊へ引継ぐことができたことは、概ね第1次隊としての任務を全うできたものと思います。

それもすべて、心身ともに疲労と緊張が続く中で思いをひとつにして高い使命感を持って活動に当たった隊員の皆さんのおかげだと思っています。

災害は、多くの経験や教訓を与えてくれます。

私の活動は、今回の地震・津波の被害の大きさ、また今なお続く行方不明者の搜索活動と照らし合わせたとき、余りにも活動範囲も狭く、期間も短く非常に微力なものです。そうした中でも第1次隊としても初動時の決断、移動途中の情報収集、県隊の運用、不確実な情報への対処などいくつかの教訓を得ました。

そして、今回の活動を通じてそれ以上に大きなものは、出動したすべての皆さんが、大規模災害現場でしか得ることのできない経験を重ねたことだと思っています。

私がいづつかの局面で、阪神・淡路大震災の経験が状況判断に役立ったように、今回出動した皆さんが、いつの日かこの経験や教訓を活かせるよう日々の訓練を重ねていただくことを心から期待しています。



余震が続く中、指揮支援本部での活動調整（名取市消防本部）

広島県隊！中央道に向かって進出せよ！！

広島市佐伯消防署 署長 消防監 友滝 真二
(派遣時 警防部警防課長)

4月1日付けの人事異動で警防部警防課長を命じられた。2日後の3日には、広島市消防局第9次派遣隊の指揮支援隊長として名取市に向かっていた。

発災から既に23日が経過している。

名取市への交替要員の派遣体制は、大型バスで現地入りし、延べ6日間、現地での活動は3日間という、基本ルールが敷かれていた。

さすがに、広島市から名取市までの道程は長い。総務省消防庁から行き先も告げられないまま出陣した第1次派遣隊の進出苦労が頭をかすめる。

翌日の午後、東北自動車道仙台南インターから名取市消防本部の職員の方の道案内を受け、ベースキャンプである宮城県農業大学校に到着、直ちに、マイクロバスに乗り換え、名取市消防本部に向かう。

消防長や幹部の方から被害状況の説明を受ける中、被災地本部では、皆んな心身ともに限界を超えていることが窺える。にもかかわらず、県隊が入れ替わる度に繰り返し繰り返し行われたであろう次長の案内による活動現場の事前視察。そんなところも、土地勘のない緊急消防援助隊は、被災地本部にとって足手まといになっているのではないだろうか？……自問自答する。

「地震による被害はほとんどないですねえ。」普段なじみのないイントネーションの東北弁。確かに倒壊した家屋は見受けられない。ところが、仙台東部道路を超えると、景色が一変する。想像していた以上の様相に言葉が出ない。どこから手を付ければいいのか？

現地視察を終え、第8次派遣隊の指揮支援隊長から、地域を分割したローラー作戦での検索活動であることなど、短い時間ではあったが引き継ぎを受けていると、広島県隊、富山県隊が活動を終了し、県隊長から消防長に活動結果が報告される。いよいよ第9次派遣隊の現地での活動の始まりだ。自ずと気合いが入る。

指揮支援隊は、広島県隊、富山県隊への活動方針の指示、消防応援活動調整本部への名取市での活動報告などを行うほか、毎日、定時に市役所で開催される名取市災害対策本部へも出席することになっている。

そのまま、対策本部へ消防長と向かい、市長に第9次広島県隊到着の旨を報告する。会議では、市役所の各部局から現状報告が行われ、緊急消防援助隊が行う救援活動と同時に復旧に向けた動きが同時進行している。

初日の慌ただしい任務を終了し、ベースキャンプに戻ると、県隊長が部隊に対し、翌日の活動内容についてミーティングを行っている。現地での活動方針を決定し、安全管理の徹底を再度指示する。

活動初日の5日、仙台市内の宮城県庁内に設置されている消防応援活動調整本部に赴く。

宮城県庁も地震による被害の跡が見える。

講堂に設置された災害対策本部には、自衛隊、警察、土木、報道等々、関係機関が所狭しとブースを構え、それぞれのチームで情報収集を行っている。

札幌市消防局指揮支援部隊長から宮城県全体の被害状況の説明を受けた。

「宮城県内には、まだ全く現地に部隊が入り込まず、手付かずの所もある。」とのこと。改めて、被害の全貌に絶句する。

実際問題として、広島県隊、富山県隊の活動内容は、緊急消防援助隊本来のスキームである救助活動から遺体搜索や被災地の消防本部の支援活動に移行し、隊員達は広範囲な被災現場で地道な搜索活動に従事している。

民家は流され、県隊が搜索している家屋の中には、必ずしも被災者がいるとは限らない。隊員の疲労は募るばかりである。

緊急消防援助隊の皆様へ感謝をこめて

名取市消防本部職員一同

「もう我々が発見すべきご遺体はここにはないのではないか？」ガレキを搜索する隊員達の気持ちも自然と萎える。

そんな中、6日の午後、広島県隊がご遺体を一体発見したという連絡が消防本部の通信指令室に入った。「ご家族の元に帰してあげられる。よかった。」思わず目頭が熱くなる。

この日の活動報告時、名取市の消防司令補の職員が活動エリア図を指さしながら、「消防長！このエリアは先般、自衛隊によって既に搜索済みの所ですが、もう一度確認したいのですが…」と申し出た。見ればかなりの広範囲だ。

「このパワーはどこから出て来るのか？」「彼らは自分達の納得の行くところまで搜索を続けたいのだ。であるとすれば、今こそ我々、応援部隊が要求に答えるべき時ではないのか。」

消防長、幹部ともに異論はない。組織の違いはあるにしろ、同じ「消防」の匂いを感じた。

同日、消防応援活動調整本部から総務省消防庁応急対策室、宮城県庁、札幌市指揮支援部隊から職員が現地調査に来るという知らせが消防本部に入る。

「いよいよ緊急消防援助隊撤退時期の最終調整か？」「名取市の搜索活動範囲は、今日広げたばかりだ。」「県内には、まだ手付かずの所もあったはず…」複雑な気持ちで待ち構える。

消防長から状況報告の後、総務省消防庁から「広島市さんは遠方からだし、実際のところ、まだ体力はありますか？」と質問を受け、「広島はまだまだやれますよ。」と即答した。

宮城県内では、被災地の消防本部と同様に、他の政令市もがんばっている。神戸市消防局は最後の最後までやると言っている。

不眠不休とはこういうことなのか？精神的にも肉体的にも疲れているのに、頭だけが覚醒しているような感覚のうちに3日間が過ぎる。

4月7日、第10次派遣隊が現地入りした。3日前の9次派遣隊の到着と同様の手順が繰り返される。部隊の交替だ。

消防本部を去る時、幹部を前にしたお別れの言葉が、言葉にならずうまくしゃべれない。

帰広翌日の9日、4月13日をもって、富山県隊と広島県隊は、緊急消防援助隊としての枠組みが解かれ、搜索活動を終了することが決定された。

「広島県隊は、いや、広島市隊だけでも宮城県内の全応援隊が撤退するまで派遣が続けられないだろうか？」と思ったのは、私だけではないはずだ……。そう思いたい。

あの震災から、早2年を迎えようとしています。犠牲となられた911名のほかに今なお41名の方々が行方不明のままとなっています。

東北地方太平洋沖地震直後には、交通事故および大規模ショッピングセンター等からの救助・救急要請で全消防隊が出動している中で巨大津波が発生したため、全ての対応に手が回らず悪戦苦闘を余儀なくされていました。

発災日の夕方には県内の仙南地域広域行政事務組合消防本部の応援隊に駆けつけていただき、夜を徹して救助活動に当たっていただきました。

消防本部総力を上げ不眠不休で被災市民の救助に当たっていたところに、翌12日の早朝に富山県隊17隊68名が到着しました。

夜間も休むことなく走り続け、名取市に来てくれたことに感謝と、藁にもすがる思いで待ち望んだその想いで涙が止まりませんでした。

富山県隊到着後は、休む間もなく活動方針の打合せを行い、被害の大きい閑上街区と避難者の多い仙台空港ターミナルビルで、それまでのほぼ2倍の人員と装備で消防活動を実施することが可能となりました。

13日18時00分、広島指揮支援隊と広島県隊33隊109名が到着しました。指揮支援隊長の話では、「広島を出発する段階では行き先は告げられず、とにかく北へ向かえとの命令で神奈川県まで来たところで名取市と指示された」と言うことを聞き、あらためて頭の下がる思いがしました。

14日からは、300名体制で消防活動が可能となり、指揮支援隊との打合せにより指揮命令、救助、救急、行方不明搜索が格段に強化されました。日数が経つにつれ救助活動からご遺体搜索に変わって行く中で、ご遺体の取扱いについて初めての経験となる我々に丁寧にご指導いただいたこと、「活動が長時間になっているので職員を休ませてください。その穴埋めは我々がします。」との暖かい言葉また「名取市のため、もっと活動したい」と札幌指揮支援部隊長に直訴して頂いたことなど、その言葉一つ一つが深く心に残っています。

23日からは、塩釜市で活動していた長野県隊が合流、さらに消防活動が強化されました。

緊急消防援助隊の皆様方には、厳しい寒さが残る中胸まで海水に浸かっての活動、手渡しで瓦礫を排除しての搜索、手足に釘を刺すなどの公務災害、PTSDとの戦い、氷点下の中での野営など、劣悪な環境の中での消防活動にもかかわらず、457人を救助し331体のご遺体を収容していただきました。さらには、活動に必要な物資を提供していただき本当に助かりました。

この未曾有の大震災を振り返り、名取市消防の活動記録をまとめましたが、当市消防が災害対応に係る全ての面で市民の負託に応えられたことは、ひとえに緊急消防援助隊並びに県内広域応援隊の皆様のご支援の賜物であると、あらためて消防活動記録誌に刻むところであります。

最後になりますが、宮城県との調整にあたっていただいた札幌市消防局、広島県隊、富山県隊、長野県隊、仙南消防本部の緊急消防援助隊並びに県内応援隊の皆様には、改めて感謝の意を表しますとともに、各道県消防本部のますますのご活躍と職員皆様方のご健勝を申し上げ、御礼とさせていただきます。誠にありがとうございました。



東日本大震災（災害対策本部）を体験して

予防課長 今野 権 蔵

今回の地震さらに大津波は、これまで経験した事のない未曾有の大災害であった。宮城県沖地震の再来がかなりの確率で危惧され、いずれは来るという覚悟はしていたが、我が名取市がこのような大災害を受けるなどとはだれも想像していなかった。

名取市においても地域防災計画が整備されていたが、想定を遙かに超える地震と津波の襲来であった。

当日私は執務中であったが、携帯電話に緊急地震速報が入ると同時ぐらいに地震が発生した。これまでに体験した事のない、いつ揺れが収まるのかと思う長い揺れであり「これはただ事ではない、恐れていた地震がついに来た！」と思った。

本災害において私は消防災害対策本部に入り、緊急消防援助隊の受援体制、野営場所の調整、燃料調達、搜索場所等の決定や指示など被災地での活動状況決定等について携わった。

3月11日夕方の時点では被害の全容を把握できず、当消防本部の職員ほぼ全員が参集し一夜を通して救急救助活動を実施した。3月12日早朝には緊急消防援助隊富山県隊が到着、発災より3日後の14日には広島県隊も到着し、活動に加わっていただく事に大変心強く感じた。

野営場所を箱塚グラウンドに決定したが、野球場である為に3月11日からの雪や雨等で車両がスリップし動けなくなる状況、大型車両が出入りするため出入り口の破損修理等を強いられた。

また、日数が経つにつれ同グラウンドに仮設住宅を建設する事になり、急遽新たな野営場所として愛島小学校、県農業実践大学校を使用させていただき事となったが、今後は数か所の場所を確保しておく事が必要だと感じた。

車両・発電機などの燃料については、隣接するガソリンスタンドに緊急車両への優先をお願いしたところ、快く受けていただき解決できたが、当本部も地震発生と同時に停電となり、非常用自家発電機を昼夜通して長期間使用しなくてはならず、オーバーヒート気味となった為、自家発は指令台専用とし、他の電源等は移動式発電機により解決する事ができた。

搜索については、広島県指揮支援隊長のアドバイスのもと、当日の搜索状況報告等を基に検討を重ね、時には現場に赴いて状況を確認しながら、翌日の搜索活動方針を決定した。しかし、海水が引かない場所、重機でしか動かさない瓦礫などで、日々状況が変化するため、予定どおりにいかに苦労した面もあった。搜索中に重機の要請に対応し調整することもたびたびあり、市の災害対策本部との密な調整が必要であった。

装備については、寒い時期海水に浸かっての活動であることから、胴長や手袋等の装備も充実させなくてはならず、さらには安全管理や健康にも気をくばる事が大事であると痛感した。

また、搜索活動の中で現場活動隊から警察・自衛隊との調整が不十分で搜索活動に支障をきたしたとの報告から、災害対策本部に於いての消防・自衛隊・警察等が参画しての情報の共有、組織別の活動方針、活動エリア等の協議の必要性を通感した。そのためには今まで以上に関係機関との連携強化に努め、いわゆる「顔の見える関係」を構築しておく事が重要であると感じた。

最後に、このたびの大震災では多くの職団員が自らの使命を全うし、住民への避難広報や避難誘導をしている最中19名が殉職してしまった。このような痛ましい事故を二度と起こしてはならず、その為にもこの大震災の記憶・記録を風化させる事なく代々語り継ぎ、検討していく事が大事なのではないだろうか。

震災時の救急活動

消防司令 阿部 和 幸

震災翌日に到着した緊急消防援助隊富山県隊の救急車3台、当消防本部予備救急車を含む4台で救急活動を実施し、計7台の調整全般を行なっていました。

広島県隊が到着する数日間は7台全ての救急車が出動しているのもあたりまえで、全て出動中は重症者からの救急要請が心配で、一刻も早く帰署して欲しいと願っていました。

緊援隊の救急各隊には薬剤投与認定救命士1名を出来る限り同乗させ、病院選定と現場及び搬送先医療機関までの案内をするよう指示しました。

病院収容の連絡は携帯電話が繋がりにくかったため、主に消防本部の電話連絡か、直接病院に向かい収容の可否を尋ねる以外方法は無かったのですが、病院側でも災害時の体制になっていたこともあり、収容がスムーズに運ぶことが出来たので大変助かりました。

1週間が過ぎると日中の救急は減少しましたが、夜間の救急要請が増えてきました。また、酸素充填の取引業者が被災したため、酸素の在庫量が心配でした。幸いにも遠方に充填が行える業者と手配がついたのですが、往復するための道路等は地震や津波により破損している事により迂回を繰り返しての搬送となり非常に困難した。

最後に緊急援助隊をはじめ、救急活動に協力していただいた医療機関そして医療物資等を送っていただいた方々、大変ありがとうございました。

津波災害に対する安全管理

消防司令補 江川 圭

平成23年3月11日、救助隊の隊長として関上大橋上の交通救助事案に出場した私は、名取川を遡上する津波を目の当たりにした。同事案により橋が通行できず渋滞に巻き込まれたドライバーや、大橋上に集まった付近住民の避難誘導を開始して間もなくの事であった。

名取川の水位が急に低下しはじめ、通常100m以上ある川幅が2m程度に。“津波の襲来”を確信した。学校まで全員を避難させるには時間がない。(津波が橋を越えて川に流されたら住民は助からない。しかし、陸地なら自分たちが救助できる!)救助工作車と住民らを橋のたもとまで移動し終えた1~2分後、太平洋から向かって来る茶色の壁、“大津波”を目撃したのである。数キロ先でも高さ7~8m以上と感じたその壁が、陸地に向かって押し寄せるにつれ恐怖心が増してくる。(これは自分たちも流されてしまう。ガードレールに確保を取りライフジャケットで浮力を得て津波に耐え、流された人を救助するしかない。だが、ロープの長さ以上の水位を超えれば自分たちも溺れてしまう。ならば、ライフジャケットで流された方が漂流物にぶつからず安全か?)安全管理の精神で、自分たちの無事がより多くの市民の救助に繋がると考え、隊員には津波到達間際まで状況を観察して回避方針を示すことを伝えた。

「津波襲来!7~8mの津波襲来!名取川を遡上し堤防を越水、関上地区浸水!」

15時54分、私が消防本部に送った無線である。幸い、大橋のたもとは浸水を免れたが関上一丁目地内は水没。瓦礫や車両、油膜等が水面を覆い、水中や倒壊を免れた家屋内には要救助者

【職員の手記】

がいる。津波はさらに繰り返して押し寄せ、仙台市から警報のサイレン音がけたたましく鳴り響く。海と川に面したこの場所での救助活動は、再度大きな津波が来れば隊員が流されてしまうし、安全な場所も確保を取る支持物もない。しかし、目の前には助けを求めている人がいる。

できる限りの安全管理を実施しながら数名の隊員とともに救助に向かったが、津波が来るたび要救助者の目の前から緊急退避をしなければならない事実は心苦しく、危険性が極めて高い現場へ連れて行く後輩とその家族に対しては申し訳なく、しかし、消防人としての『助けなければならない』という使命感とで葛藤した。

今となっては安全管理が不十分であったことは否めないし、ベストな選択や指示ではなかった部分に反省点もあるが、目の前の要救助者全員を救出できたことに、その時その場所において最善の救助活動が行えたと思う。また、最後まで同行してくれた隊員たちの『救助魂』には、敬意と感謝の気持ちでいっぱいである。

自然災害での安全管理が難しいことは承知していたが、今回の津波は規模も被害も想定外であった。今後も予測し得ない災害に対応できるよう、消防人として日々研鑽していかねばならない。

東日本大震災

消防士長 阿部 忍

平成23年3月11日14時46分、私は一生忘れることができないであろう体験をした。その日は当直勤務中で庁舎2階事務室にいた。小さな揺れを感じ「またすぐに収まるだろう」と思っていたが、強い横揺れになり机につかまり立っているのがやっとの状態だった。体験したことの無い長い揺れに「庁舎が倒壊してしまうのではないか」、「これが宮城県沖地震か」と思い強い恐怖心がうまれた。

長い揺れが収まり、急いで車庫から車両を出し出動の準備をしている最中に大型ショッピングセンターへの救助指令が入った。書店の本棚の下敷きになっているとの内容だった。救助工作車で現場へ出動。到着時、買い物客はすでに駐車場へ避難しており、強い余震に不安な顔をする人や泣き出す人もいた。関係者と合流し状況確認したが、店員により救出済みであった。幸いにもたいした怪我人も出ずに済んだ。もし、火災や倒壊がおきれば相当な被害が出たであろう。

建物周辺の被害を確認中、今度は閑上地区への救助指令が入った。閑上大橋上で走行中のトレーラーの荷台からコンクリートの支柱が地震の揺れにより落下し、反対車線を走行中の乗用車を押し潰したものと事であった。出動途上、通信指令室から大津波警報が発表され6mの津波が予測されるとの無線を傍受。私は「本当に津波がくるのだろうか」と思いつつ現場まで行った。到着して乗用車を確認し活動に入ろうとした時、名取川からの異様な気配を感じ視線を川に向けると、もの凄い勢いで川の水が引きはじめていた。津波がくる前に水が引きはじめるという話は聞いていたが、初めて見たこの異様な光景を目の当たりにして「津波がくる！」と確信した。土手を歩いている住民を橋まで避難させ、少しでも高い場所に避難させようとトラックの荷台に乗せた。誰かが「津波だ！」と叫び海を見ると、茶色い大きな壁が轟音と共に向かってきた。津波の勢いは凄く、バキバキと音をたて家をなぎ倒していき同時に黒煙も数箇所から上がっていた。「こ

れが津波の威力なのか」と圧倒され橋の上に立ちつくしてしまい「死」を覚悟していた。先輩の「車に乗れ！」の声に急いで救助車に乗ったが、津波の脅威から逃れられるわけでもない、ただ「橋を越えないでくれ！」と祈るばかりだった。幸いにも津波は橋を越えることはなかったが、救助車を降り廻りを見回すと閑上全体が津波にのみ込まれ家や車など、あらゆるものが流され、数箇所では火災が発生している。信じられない光景に「どこから救助しに行けばいいんだ」と思ったその時、橋の近くまで流されて来た瓦礫の中に頭部を出して助けを求めている男性と、流れてきた屋根の上で助けを求めている女性がいた。必死に瓦礫や屋根にしがみついている、一刻も早く救助しなければという思いと、津波の第二波、三波への恐怖と不安、消防人としての使命感と責任感が入り混じった状態で活動していた。途中津波襲来により活動は中断もあったが、2名を救出することができた。しばらくして応援隊が到着し仲間の顔を見てホッとしたのと、今後の救助活動に心強さを感じた。その後歩道橋に残された人達の誘導、暗闇の中で要救助者の声だけを頼りに東部道路東側に流された車両からボートでの救助活動を行い朝をむかえた。

今回の震災で消防職員をはじめ、多くの市民の尊い命と財産が奪われた。しかし、私たちは震災を経験し得た多くの教訓を後世に伝えていかねばならず、決して想定外という言葉で終わらせてはいけない。また、志半ばで殉職した職員の分までこれからの消防人生を全うしていくことを心に誓う。

消防官として

消防士 小浅弘志

私は、平成22年4月に名取市消防本部の消防士として拝命され、1年間の基礎教育を受ける為に消防学校へ入校しました。様々な事を学び、卒業式を一週間後に控えた3月11日に東日本大震災は起きました。地震発生時、授業中であつた我々は、揺れの激しさそして被害の大きさから自宅待機となり、それぞれが不安な気持ちを抱えた状態で自宅へと戻りました。日々刻々と被害の大きさ、地震の凄まじさを新聞等で目にする中、消防署より参集するように命令を受けたのは3月15日でした。

この時点で消防学校の学生ではなく、消防署の一員として働くのだと思い、気を引き締めて消防署へ向かいました。消防署に着き、行方不明者の捜索を行うことになりました。消防学校で約1年間訓練や勉強をしましたが、実際の災害現場の状況を目の前にした時の恐怖感、そして災害現場の経験がない私に何が出来るのかという不安感でいっぱいでした。私は、消防官として人を救いたい、人の役に立ちたいという気持ちでこの職を選びました。しかし発生から長時間が経過しており、生存者を救助する為の活動ではなく、遺体捜索の為の活動が多くなっていました。この理想と現実の差、そして毎日の活動により心身共に疲れていました。その頃に住民の方から、「いつもお疲れ様です。頑張ってください。」と声をかけて頂きました。この時に私だけではなく全ての人が恐怖、不安、疲労を感じていること、そして私がやっている事も少なからず役にたっているのだと感じました。

これからも生きていく上で災害はつきものだと思います。無くならない災害に対して、被害をどれ程少なくできるのかが重要だと思います。消防人生1年目にして大きな経験をし、色々

【職員の手記】

と考えた結果現在救急救命士を目指しています。人を救いたい、役に立ちたいという思いは今も変わらず、救急救命士となりその目標を果たしていきたいです。

経 験

消防士 大 沢 宥 人

あと数日で消防学校を卒業という、3月11日の訓練中東日本大震災が発生しました。その後学生は各所属からの指示があるまで自宅待機になりました。私は帰る手段がなかった為その日は学校に残り翌日教官に家まで送っていただき帰ることができました。

帰る途中に仙台港の石油コンビナートの火災の煙、電柱や外壁が倒れているのを見て、さらに沿岸部には津波の被害もあるという情報を聞いていたので被害の大きさを実感しました。そして、震災から4日後の15日消防署へ来るようにとの命令を受け、私は緊張しながらもやっと自分も消防士として市民の役にたてるということで気を引き締めていきました。でも実際初めて津波の被害をうけた現場に行った時は想像以上の状況で、驚きと同時にいきなりこんな現場にでて大丈夫なのかと不安になりました。そんな中待っていた仕事は人命救助ではなく行方不明者の捜索でした。私はその時が人生で遺体を見たのが初めてだったのでかなり衝撃を受けたのを覚えています。その後も毎日その繰り返しで、正直精神的にもかなり疲れていました。でもある現場で遺体を搬送した時に、家族の方が「おかえり、見つけてもらってよかったね」と語りかけているのを聞いて、もっと一人でも多くの方を見つけてあげたいという気持ちが強くなり、その後の活動も頑張れた気がします。私はこのような東日本大震災での経験を消防人生で一番初めに経験したことを忘れずに、沢山の学んだことを今後活かしていきたいと思います。

省 み て

1. 多くの犠牲者が出た要因について

太平洋の遠浅の沿岸では津波は来ないとの言い伝え、平成22年2月のチリ地震時の大津波警報でも津波は来なかったこと。また、平成16年9月インドネシア・スマトラ大地震による死者・行方不明者32万人を出した大津波でも直接被害は受けていないので自分のこととして捉えていない、危機意識を持っていない等で津波は来ないだろう、家族がいるから助に行く、その他人ごとの考えと切羽詰った行動が大災害を引き起こした一つとも考えられます。

地震等が発生した場合、自ら情報収集し「まず、いち早く逃げる」ことを市民自ら認識することが自助と減災の基本でもあり、被害を最小限に食い止めることが出来ることであります。

2. 避難誘導中に亡くなられた消防団員の身元確認

亡くなられた消防団員の遺体検案時、活動服は着ているが顔の判別が出来なく、地元分団長に確認をお願いするなど本人特定が困難だった。このことは、活動服に名前をつければ解決することから、今後、消防団活動服にも本人特定の為の名前の着用の必要性を感じた。

3. 津波直後の住宅火災の出火原因

原因のはっきりしているものでは、名取市以外の町で住宅の太陽光発電装置から出火した例があった。その後の動画等で確認すると、流れの中に液化状に噴出しているものが突然炎となる場面があることから、推測ではあるがLPガスボンベ等が流されて衝突することにより、その火花で漏洩ガスに引火し住宅及び瓦礫等に延焼したものと推定できるものがあった。

4. 警察及び自衛隊との連携

当初、瓦礫の中に遺体を発見するも動かしてはならないとの警察からの指示により、捜索活動を中止しなければならないことがしばしば発生した。その都度重機を止め、警察官の現場臨場を待つなど、捜索活動が思うように進まないなどの弊害があった。いち早い遺体の収容等も含め、警察との詳細な事前打合せが必要である。

また、捜索活動の中で、自衛隊とは捜索エリアを決めて活動していたのであるが、その状況によっては自衛隊のエリアに入らざるを得ない場合もあった。自衛隊からなぜ入るのかと質問されたが、この理由を説明し、誤解のないように捜索活動を実施すべきであった。

5. 捜索時における余震での津波情報

捜索時、余震による津波情報が度々発せられ、その都度活動を中止し避難を強いられた。その内容は、気象庁からの情報のほかに、関係機関のヘリコプターから情報発信されたものなど様々であった

6. 緊急消防援助隊の野営について、衛生管理面から適切であったか

発災当初は、雪なども降っておりかなり寒かった。また、泥水の中での捜索など劣悪な環境下での活動であるのに、シャワー・風呂等が最初は使えなかった。緊急消防援助隊はいかに自己完結型とはいえ、衛生管理は活動上最も重要な部分の一つである。内陸部は津波の被害がなかったことから、シャワー等の使用についてはもっと早い時期に、もっと早く市内のホテル・事業所等に問い合わせすべきであった。

7. 消防職・団員の安全管理

東日本大震災前においても、名取市消防災害対応マニュアルでは大津波警報などの場合、津波到達予定時刻10分前には安全な場所に避難するとなっているが、「市民を避難させなければならない」との消防職・団員としての強い使命感から多くの犠牲者が出た。市民を救助する消防職・団員が被災したのでは、災害後の救助が出来なくなることから、「退避するときは勇気を持って退避する」ことを徹底しなければならない。

8. 消防活動を支える設備の維持

今回の震災で、消防本部では4日間と8時間停電した。その期間全て、2台の自家発電設備で指令台等に電気を供給したが、担当した職員はその間、3時間毎に50リットルの軽油を給油し続けた。災害現場には出勤しなかったが、消防活動を支える為裏方に徹した職員の評価も忘れてはならない。また長時間の過負荷により、電圧不足となり非常停止することも度々あったが、その都度だましまし再始動させ電力を供給した。

むすびに

2011年3月11日14時46分未曾有の大地震が発生し、大津波が東日本の太平洋沿岸を襲ったあの震災からまもなく2年になります。

今回の震災において、被災されました方々にお見舞いを申し上げますとともに、亡くなられた方々に対しご冥福をお祈り申し上げます。

また、危険を顧みず市民の生命を守るべく、救出や避難誘導等の任務に尽くされ、地域のために、身を挺して自らの職責を全うし、大変不幸にして消防の職に殉じられた、職団員に対し心より哀悼の意を捧げます。

さて、各地に甚大な被害をもたらした、東日本大震災はこれまでとは想像できなかった巨大津波というまさに想定外の被害をこうむる大災害となった。

当消防本部も人的及び施設設備に甚大な被害を受けさらに、燃料不足、ライフラインの途絶、食料等の物資調達が困難な中これまで経験したことのない規模で、先の見えない災害対応を強いられた。このような状況の中、全国の消防本部から長期間にわたり過去最大規模の消防援助隊が派遣されました。

当本部には、広島県隊・富山県隊・長野県隊と県内から仙南地域広域行政事務組合消防本部の緊急消防援助隊並びに県内応援隊が余震の続く中、初期の救助活動から捜索活動まで1ヶ月にわたり支援をいただいたことは、我々にとってもっとも心強い限りであり、住民の方々にとって何より大きな希望と励ましになりました。

この記録は、名取市消防本部の活動記録を始め、緊急消防援助隊からの受援状況の記録、そして津波を目の辺りにして余震の続く中、現場活動をしたそれぞれの体験や思いを綴ったものとなっています。自らも被災し、大切な仲間や消防車両・施設等を失いながら、未曾有の大震災に立ち向かった消防職員の使命感と献身的な災害活動を、後世に語り継ぐための記録と言えるものです。また、防災の基本は地域の絆であり「自助・共助」いわゆる住民相互が支えあい苦難を乗り越えるため地域防災力向上が今後の課題であることから、今回の教訓を未来に生かし「減災」の推進を図るため、この記録が防災リーダーの育成と防災教育の一助となれば幸いです。

むすびに、このたびの震災では、多くの皆様から物心両面にわたり、さまざまなご支援とご協力をいただいたことに対し、感謝と御礼を申し上げます。

平成25年3月11日

名取市消防本部

次長 兼 消防署長 **大内正勝**



編集後記

東日本大震災は、名取市に人的・物的にも甚大な被害をもたらすとともに、消防防災体制に大きな教訓を残しました。この災害で、当消防本部が行った活動内容を後世に伝えるため「活動記録誌」を作成することといたしました。

本記録誌を作り始めて分かった事ですが、当消防本部には災害活動の画像データがこんなにも少ないことか、これでどうやったら記録誌が出来るのかと途方に迷いました。

しかし私達も、地震発生と同時に現場へ出動し不眠不休で救助活動を続けており、記録のため写真を撮る事など頭の隅にも無かったことを思い出しました。

「どうにかしなければ」、ここから画像データ収集の戦いが始まりました。市の震災記録室に出向き画像データを確認しましたが、発災直後の消防活動写真等は全くと言うほど見つかりませんでした。最後の頼みは、名取市に助けに来てくれた緊急消防援助隊広島県隊、富山県隊、長野県隊、そして県内応援隊の仙南消防本部に災害活動の画像データ提供をお願いし、早く画像データを送って下さった事により、大分時間を要しましたがこの記録誌を完成させることができました。

編集を進めていくうち、あらためて同僚を亡くしたことが思い出されその無念さに胸が締め付けられる思いがしました。市民を守る盾となり殉職された消防職員3名と消防団員16名の方々の名前をいつまでも忘れることのないよう、ご芳名させていただきました。

この記録誌を編纂するにあたりご協力をいただいた皆様、関係者及び関係機関の方々に、深く感謝申し上げます。また、この記録誌が今後どのような形であれ、防災の一助になれば幸いです。

誠に有難うございました。

編集員一同

3.11 東日本大震災 消防活動記録

発行日 平成25年3月11日

発行 名取市消防本部

〒981-1224 宮城県名取市増田5丁目18番32号
TEL 022-382-3019

印刷 株式会社 ペナントコーポレーション



平成25年1月現在の関上出張所

津波に飲み込まれた
名取市消防署 関上出張所
「写真提供：金矢泰弘」